

## 館長だより 6月号(2019/6)

新緑が映える時期となりました。和歌山県立紀伊風土記の丘でも山の木々が新緑に映え、すがすがしい雰囲気のもと、新元号令和元年を迎え、気持ちも新たに各種行事に向かって動いております。

さて昨年度から続いておりました春期企画展「縄文・弥生の「海の道」と「陸の道」は5月12日に終了いたしました。多数のご観覧感謝いたします。

来る6月1日から30日までの予定で和歌山県内埋蔵文化財調査成果展「紀州のあゆみ」を開催いたします。この展示は公益財団法人和歌山県文化財センターによる展示で、近年行なわれた発掘調査の最新成果をいち早く公開するものです。

今回は「近世武家屋敷の建つ以前は田園風景だった」(和歌山市一和歌山城跡)、「近世城下町の下に中世の物流センター」(新宮市一新宮城下町遺跡)、「中世の宿泊所や茶店の可能性あり?!」(田辺市一道湯川集落跡)などの速報展と「弥生時代から古墳時代の集落を確認」(和歌山市一東城跡)の整理事業などが報告展示されます。

和歌山城跡については、現在の地表面から約4m以上掘り下げて調査をした結果、弥生時代から江戸時代の遺構面10面を確認しました。これにより武家屋敷内の生活をうかがえる資料を得ることができ、安土桃山時代には畑と集落を区分する大溝があり、それ以前には畑や水田が広がっていたことがわかりました。

新宮城下町遺跡は、史跡新宮城に隣接する遺跡で、江戸時代の城下町に関連する遺構が多く見つかっていましたが、今回それらの下層の調査を行った結果、中世の遺構が多数見つかりました。とくに半地下式倉庫といわれる貯蔵施設が20カ所確認され、当時の流通システムを考えるうえで貴重な資料となるものです。これらの遺構からは室町時代の中国磁器や常滑、瀬戸などの陶器が多数見つかっています。

田辺市道場川集落跡は、和歌山県が実施している熊野古道見どころ整備事業の一環として行われた発掘調査で、鎌倉時代から安土桃山時代に建てられたとみられる掘立柱建物跡が見つかりました。建物は規模も大きく周辺から中国青磁などが見つかっていることなどから、参詣時の宿泊所や休憩所に使われた建物の可能性があると考えられます。

東城跡(和歌山市)については昨年度に成果展示を行いました。その後の整理事業の進展によって新たに明らかになった弥生時代から古墳時代の集落跡について解説します。以上のほか和田岩坪遺跡、田屋遺跡、吉礼Ⅲ遺跡(和歌山市)、根来寺遺跡(岩出市)、湯浅城跡(湯浅町)などについて速報展示を行います。

7月20日から9月1日にかけては夏期企画展「すき・すき・からすきー田んぼにお水が入るまでー」が開催されます。県内の鋤・鍬・カラスキの中でも古い形とされる長床犁(ちょうしょうずき)にスポットをあて、これら農耕具の移り変わりを展示します。

また6月、7月には、第10回HANI-1選手権をはじめとする各種の体験・講座が目白押しです。詳しくは風土記の丘ホームページ、または紀伊風土記の丘(Tel 073-471-6123)までお問い合わせください。